

親友からの手紙

突然、親友からわたしのところに手紙がきました。中学からの長いつきあいで、普段あまり会うことはないのですが、何かあるとよく話し合う仲でした。でも、電話やメールでなく手紙が来ることは初めてのことで、いったい何があったんだろうと思って中を開けてみました。

この前は、久しぶりに出会えたのに、ゆっくり話せなくてごめんなさい。実は、このところ中学生の娘とうまくいってなくてイライラしていたのです。

反抗期なのは分かっているつもりだけど、あの子のすることなすことが理解できなくて…

この前も服を買う買わないで言い合いになってしまって、その時、この子のことを憎らしく思っている自分に気がついたのです。小さい頃は、笑ってくれるだけでもかわいくてたまらない、と思っていたのに、この子のことを愛せなくなってしまったのかと思うと落ち込んでしまって…

同級生で子どもたちの年齢も近い彼女とは、たまに子育てについて話したりしていましたが、こんな弱音を吐く彼女の姿は見たことがなく、正直驚いてしまいました。

手紙の続きは、次のような内容でした。

そんな時、偶然街で中学校の時の先生に出会ったのです。

あのころわたしたち、結構先生に迷惑かけていたでしょう。それが、この間ばったり出会ってさっきの話をしてみたのです。先生は、「自分が中学校の頃はどうかだったかな？」と笑顔で聞くと、静かにわたしの答えを待っていてくれました。そして、

「君たちも反抗期があったよね。娘さんも君に似てるんじゃないのかな？娘さん云々より自分自身のいやなところを見ているみたいで、君自身がいやになってるだけじゃないのかな？まずは自分を好きになれるかどうか、いくつになっても大切ではないかな。」

と、あの大きな目でわたしをのぞき込みました。

わたしが「そんなこと言っても、わたしに良いところなんかないから…」と下を向きながら言うと、先生は笑いながらこう言いました。

「そうかなあ？わたしは君の自己主張のしっかりしたところが好きだったけどなあ。人間だから短所なんていくらでもあるさ。あの頃は、君たちの短所は半分に、長所は倍ぐらいって気持ちで見守っていたつもりだよ。それに、親子が言い合ったり、ぶつかり合ったりするなんてうらやましいなあ。最近は親子でも『事なかれ主義』のところもあるからね。まあ、今度一度わたしの家にしゃべりにおいでよ。」

わたしは、先生と話をしていた少し心が楽になった気がしました。自分のことも、子どものことも、もう少しゆったりと受け止めていこうかな、と思っています。

今度また先生と出会うことになっています。

手紙を読み終えたところに、今年6年生になったわたしの娘が2階から下りてきました。わたしは、思わず娘の顔をまじまじと見入ってしまいました。

「おかあさん、わたしの顔になにかついてるの？」

「いいえ、そうじゃないのよ。」

そう言いながらひとりニヤニヤしているわたしを見ると、娘は不思議そうな顔をして、外へと遊びに出て行きました。